

### 東奈良遺跡の絵画土器

藤田 三郎

#### 1. はじめに

東奈良遺跡は、これまでの発掘調査の成果から弥生時代全期間を通しての大規模な集落であることが判明するとともに北摂地域の拠点集落として認識されてきた。この東奈良遺跡で出土した石製銅鐸鑄型に代表される青銅器鑄造関連遺物は、近畿地方における青銅器生産の一拠点であることを示しているが、このような大規模集落では絵画土器も多く検出されており、大規模集落の重要な属性のひとつとなっている。青銅器生産遺跡である東奈良遺跡で鑄造された銅鐸には、魚やトンボの絵画が存在する。一方、弥生土器にも絵画が描かれ、この2つは「刻む」・「描く」という差異はあるけれど集落内の全く異なる環境下で「絵画を製作」した遺跡といえる。このような両者を保有する遺跡は、この東奈良遺跡と奈良県の唐古・鍵遺跡（註1）だけである。

さて、東奈良遺跡ではこれまでに弥生時代中期から後期の絵画土器が多く出土しており、それらは機会ある事に報告されてきた。私は近畿地方の絵画土器を研究する中、これら紹介された絵画土器を熟覧する機会を得、東奈良遺跡の絵画土器が近畿地方の出土遺跡の中でも重要な位置を占めるという考えに到った。また、既報告では触れられていない点もあることから、今回、寄稿の機会を与えていただいたので既に紹介されたものを含め、茨木市教育委員会が所有する絵画土器について、新たに図面を提示するとともに観察結果を通して東奈良遺跡の絵画土器を評価したい。

#### 2. これまでに報告された絵画土器

東奈良遺跡出土の絵画土器の報告は、1979年の東奈良遺跡調査会による長頸壺に描かれた龍絵画の報告（東奈良遺跡調査会1979）に始まるが、1980年に奥井哲秀氏が考古学雑誌の絵画土器の特集で5点の弥生時代中・後期の絵画土器を紹介（奥井1980）したことによって、広く知られるようになった。それら紹介された絵画土器

は、弥生時代中期の鹿2点、鹿・建物、魚各1点と後期の四脚動物1点であった。その後、大阪府文化財調査研究センターの調査によって、鹿絵画1点が出土（（財）大阪府文化財調査研究センター編1998）。また、膨大な出土品の再整理によって銅鐸絵画等が発見され（茨木市立文化財資料館2013）、それら新出資料12点を含め『新修 茨木市史 第七巻 史料編』では19点の絵画土器（浮文含む）が掲載された（茨木市史編さん委員会2014）。その後も再整理が進められ、鹿や龍の絵画土器、円盤形土製品に点描された人物画など重要な絵画が見つかっている（正岡2019、2022、茨木市立文化財資料館2019、高村2020）。

現時点で確認（未発表含む）されている東奈良遺跡出土の土器・土製品に描かれた絵画は27点になる。そのうち時期が示されたものは中期6点、後期3点である。今回、大阪府文化財調査研究センター所蔵の1点を除き観察したが、器種や個体認識（同一個体有）に相違がみられた。これらの点については、次節において説明するが、結果的には中期16点、後期7点、時期不明等3点になると考えている。

#### 3. 絵画土器の観察と所見

東奈良遺跡の絵画土器を観察するにあたり、その視点となる分類方法（絵画土器の大きさや絵画の大きさ、線刻の種類）を今後示す予定であるが、本稿においてはその主要部分を図1・表1とした（藤田2023b、藤田2024予定）。また、その予定稿では東奈良遺跡の絵画土器についても触れているが、詳細は説明できていないので再度論じる部分もあるがご容赦いただきたい。

さて、実測・拓本したものは図2・4・6（1～20、以下、図番号は略し番号のみとする）に、また、観察のみのものを含めて全体を表2にまとめた。

1は、胴部に対して頸部がかなりすばまっていることから弥生時代中期後半の細頸壺と考えられ

表1 絵画土器の分類

絵画土器 (壺)の 大きさ	土器Ⅰ類	器高65cm以上 (80cm前後が主)	胴径25cm前後
	土器Ⅱ類	器高50～65cm (60cm前後が主)	胴径20cm前後
	土器Ⅲ類	器高35～50cm (40cm前後が主)	胴径15cm前後
	土器Ⅳ類	器高35cm以下 (30cm前後が主)	胴径10cm前後
絵画の 大きさ	絵画A種	15cm前後	
	絵画B種	10cm前後	
	絵画C種	5cm前後	
絵画の 線刻	線刻1種	線刻のブレがなく、筆致に勢い(力強い)のあるもので画題の輪郭が明確なもの	a種：表現にバランスがとれているもの b種：表現が稚拙なもの
	線刻2種	線刻にブレがあり、筆致が弱々しいもので画題の輪郭が不明確なもの	

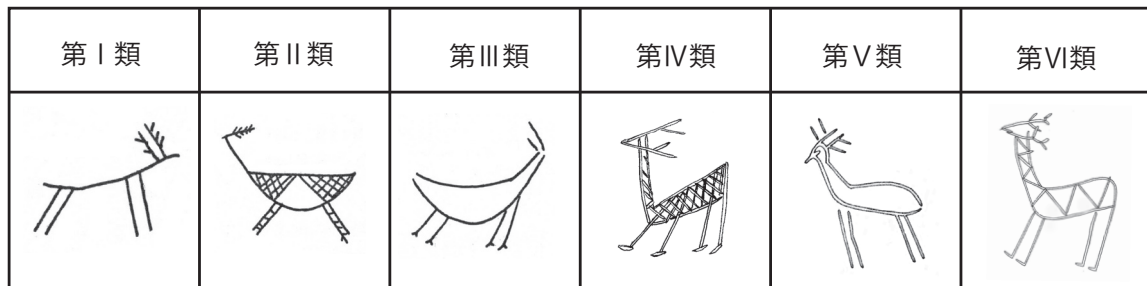


図1 鹿の形態分類図

る。胴部上半には櫛描き直線文を施し、絵画はその櫛描き文に重ねるように左向きの鹿3頭を描く。鹿は8cmほどの大きさで、壺に全周させていたかどうかはわからないが、土器の大きさ(Ⅲ類/胴径約34cm)に対して鹿が大きく描かれている。頭部は輪郭がなく1本線であるのに対し、角の主幹は大きく内湾させながら両枝まで描く。胴部は大きく湾曲する三日月状で臀部が尖っているのが特徴である。頸部は2本の線刻で表現するが、その内部にも縦線1本を挿入、胴内部には鋸歯文に充填する。足は突っ張るように描かれ、全体として鹿の特徴をよくとらえた熟練度の高い絵画といえる。鹿絵画の形態分類については、既に村田幸子氏(村田2012)や深澤芳樹氏(深澤2014)による分類・変遷が示されている。ただし、本例にみるような胴部形態の特徴に特化されていないこともあり、その視点でみた場合、私の分類(図1)では第Ⅲ類になる。このような鹿の形態は、東奈良遺跡では3がそれにあたる。他の遺跡(図3)

では、全体的にみれば東大阪市瓜生堂遺跡例(中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会1971)、鹿の向きは逆で高槻市安満遺跡例(大阪府教育委員会1969、原口1973)と奈良県田原本町清水風遺跡例(田原本町教育委員会編1997)、鹿の向きと脚の向きが逆になる八尾市亀井遺跡((財)大阪文化財センター編1980)と広島県地蔵堂遺跡例(加藤1980)がある。多く描かれる鹿絵画の中にあつてこの胴部形態は少なく、この表現のもとになった鹿絵画の原画がどこからのものなのか今後の課題となろう。

2は、これまで鉢の口縁部とされていた絵画土器(奥井1980)である。小片であるが、下記の観察から有段口縁壺(註2)の口縁部のほうが良いと考えている。

ア. おおよその口径を推測するならば、約36cmに復元できる。仮に、鉢とした場合の一般的な口径サイズは、中形は20～25cm、大形は45cm程度になるから、いずれにも合わない。

表2 東奈良遺跡出土の絵画土器等一覧表

図番号	器種	時代	土器サイズ	線刻部位	画題	絵画の大きさ	線刻の種類	備考	茨木市史掲載番号等文献
1	細頸壺	中期後半	土器Ⅲ類	胴部	左向き鹿3頭	絵画B種	線刻1-a種	右利き	茨木市立文化財資料館2019
2	有段口縁壺	中期後半	土器Ⅰ類	口縁部	切妻建物1棟・左向き鹿1頭	絵画C種	線刻2-b種	右利き	市史(図149-2-13)、奥井1980(第2図)
3	壺	中期後半	土器Ⅰ類	胴部	右向き鹿1頭・左向き魚1匹	絵画B種	線刻1-a種	左利き?	市史(図149-2-17・18)、奥井(第5・6図)
4	有段口縁壺?	中期後半	土器Ⅰ類	胴部	左向き鹿1頭	絵画A種?	線刻1-a種	右利き	市史(図149-2-15)、奥井(第4図)
5	壺	中期後半	土器Ⅰ類	胴部	左向き鹿1頭・不明1	絵画C種	線刻1-a種	右利き、外面磨滅	
6	壺	中期後半	土器Ⅰ類	胴部	右向き鹿2頭	絵画C種	線刻1-a種	左利き?、外面磨滅	市史(図149-2-9)
7	壺	中期後半	土器Ⅰ類	胴部	建物(梯子)・左向き鹿?	絵画B種?	線刻1-a・2種	右利き	市史(図149-1-6)
8	短頸壺	中期後半	土器Ⅱ類	胴部	銅鐸・鹿1頭・縦型流水文	絵画B種	線刻2-a種	左利き?	市史(図149-3-19)
9	壺	中期後半	土器Ⅰ類	胴部	切妻建物1棟	絵画B種	線刻1-a種		市史(図149-1-8)
10	壺	中期後半	土器Ⅰ類	胴部	不明(半裁楕円内に斜線)	絵画B種?	線刻1-a種		市史(図149-1-2)
11	短頸壺	中期後半	土器Ⅲ類	胴部	人物・船・不明	絵画B種	線刻1-a種	左利き?	市史(図149-2-10)
12	壺	中期後半	土器Ⅰ類	胴部	不明(縦線と横線で構成)	絵画C種	線刻2種	線刻の一部はミガキにより潰れる	
13	壺	中期後半	土器Ⅰ類	胴部	不明・×記号(後刻?新傷?)	絵画B種?	線刻2種		
14	長頸壺	後期前半	土器Ⅳ類	胴部	龍・記号(竹管文/横並列2)	絵画C種	線刻1-b種		市史(図149-2-14)、調査会(1979)
15	広口壺	後期前半	土器Ⅳ類	胴部	龍	絵画C種	線刻1-b種		高村2020
16	長頸壺	後期前半	土器Ⅳ類	胴部	弧線(記号?)	絵画B種?	線刻1-a種		
17	長頸壺	後期前半	土器Ⅳ類	胴部	三日月状の上下に縦線(記号?)	絵画C種	線刻1-a種		市史(図149-2-16)、奥井(第3図)
18	広口壺	後期前半	土器Ⅳ類	胴部	不明(幾何学文様状)	絵画A種	線刻1-a種	5片	高村2020
19	壺	後期?	土器Ⅳ類	胴部	船?(船体・櫂)	絵画B種?	線刻1-a種		市史(図149-2-11)
20	不明	後期?	土器Ⅳ類	胴部	動物?	絵画C種	—	浮文による	市史(図149-2-12)
未掲載	円盤形土製品	中期	—		人物	絵画C種	—	刺突による	正岡2022
未掲載	甕?	中期	土器Ⅰ類?	胴部	右向き鹿2頭	絵画B種	線刻2種		大阪府文化財調査研究センター1998
未掲載	壺	中期		胴部	後刻?新傷?	絵画B種	—		市史(図149-1-1)
未掲載	形象埴輪?	古墳?	—	—	不明(渦文)	絵画A種?	線刻1-a種		市史(図149-1-3)
未掲載	壺	後期	土器Ⅳ類	胴部	不明(渦文)	絵画B種?	線刻1-a種		市史(図149-1-4)
未掲載	鉢	後期後半	土器Ⅳ類	胴部	不明	絵画B種?	線刻2種		市史(図149-1-5)
未掲載	壺	後期	土器Ⅳ類	胴部	不明(記号?)	絵画C種	線刻1-a種		市史(図149-1-7)

イ．口縁部上端外面側に刻目を巡らし、その下に凹線文1条を巡らす。このような施文は有段口縁壺にみられ、鉢の場合は口縁部の凹線文は1条でなく、多条になる。

ウ．破片の下端には、擬口縁の剥離面が存在する。これは有段口縁壺の口縁部の立ち上がり部の成形手法に合致する。

このような推測が正しければ、この土器は高さ80cm(土器Ⅰ類)ほど有段口縁壺の口縁部に比定でき、その口縁部に鹿と建物が描かれた。このような器種と絵画部位の構成は、和泉市池上曾

根遺跡(秋山・小林ほか1997)や田原本町唐古・鍵遺跡(藤田2003)、和歌山市太田黒田遺跡(大野左千夫・井馬好英2001)、かつらぎ町西飯振Ⅱ遺跡((財)和歌山県文化財センター2007)などに類例がある。そこに描かれた鹿の形態は鹿胴部の背中側が直線で描かれる(図1、第Ⅱ類)で共通する(深澤2014、藤田2023b)。このようにみてきたとき、これら一群の絵画土器は、共通の祭式の中で描かれたものと推定できる。時期的には弥生時代中期後半の前葉と考えられ、東奈良遺跡の絵画土器としては1とともに古く位置づけられ

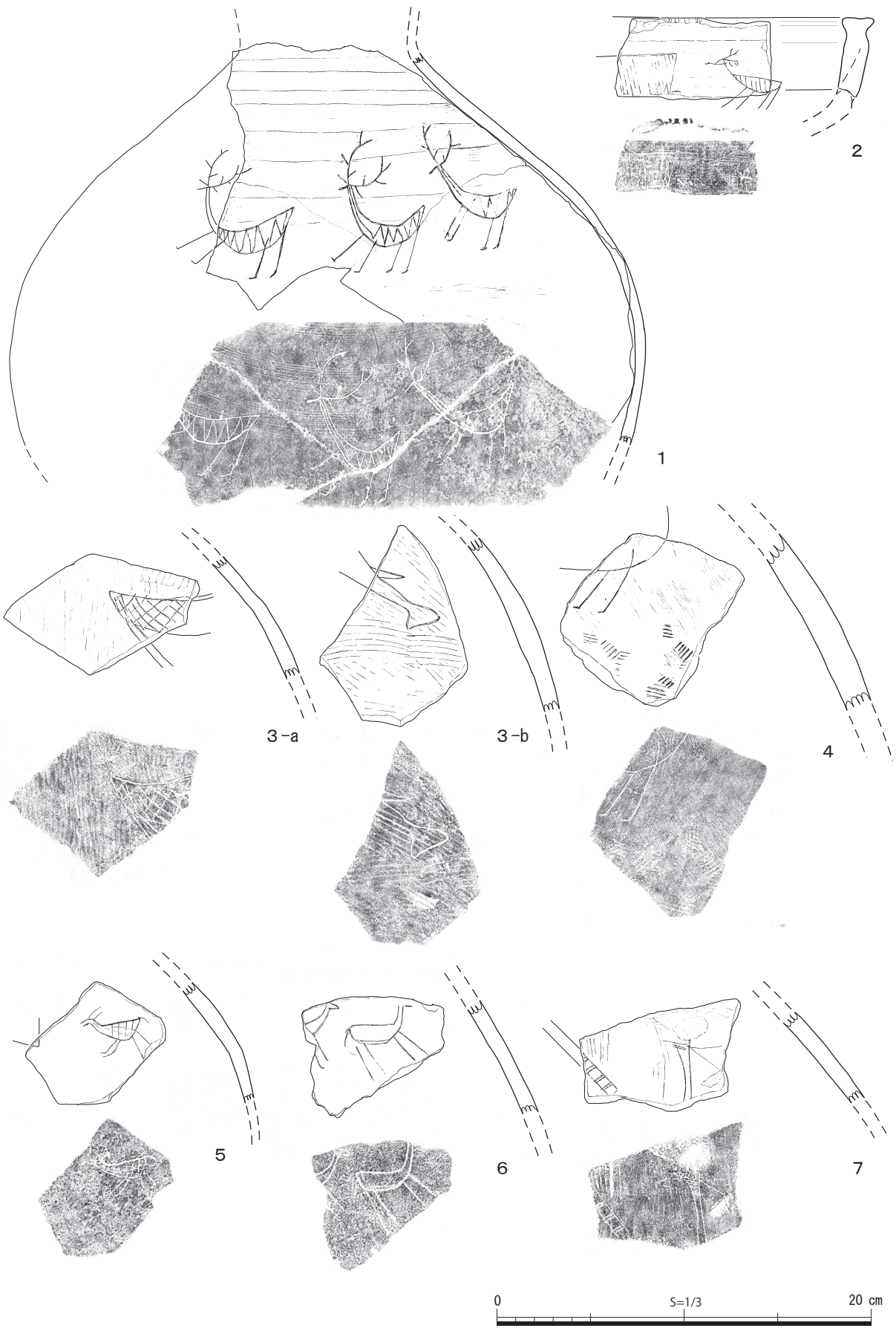


図2 東奈良遺跡の絵画土器（1）



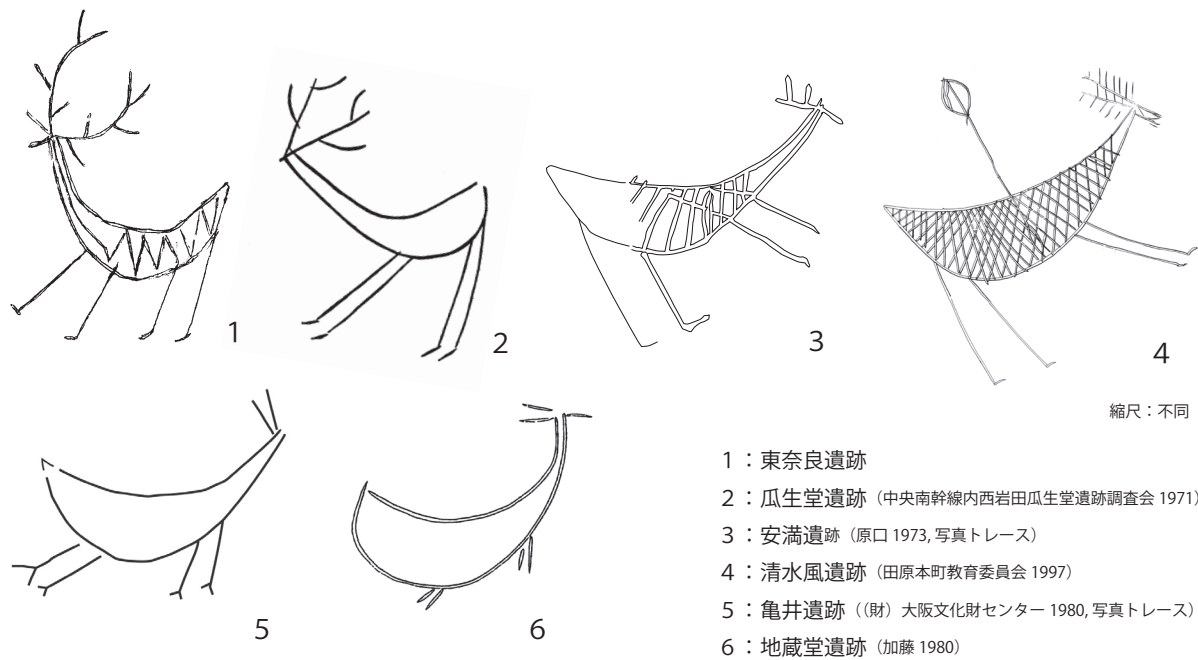


図3 鹿形態第Ⅲ類の類例

よう。さて、奥井哲秀氏はこれら鹿と倉庫の絵画について、倉庫は柱が非常に低く棟持柱もなく線刻が不鮮明な点で倉庫にすることにやや躊躇されている。確かに鹿絵画のバランスからすれば、逆台形の輪郭の下側に柱がとりつくことは無理である。しかしながら、現在では建物の柱が省略されている橿原市四分遺跡例（奈良国立文化財研究所 1998）や切妻建物で棟持柱表現のない唐古・鍵遺跡例（田原本町教育委員会 2015）や清水風遺跡例（唐古・鍵考古学ミュージアム 2020）など多く存在する。このようにみてきたとき、この線刻は切妻建物で柱が省略されたものとみなされる。

3は、鹿と魚が描かれた絵画である。これまでこの2点の絵画土器は、別々の絵画土器片として取り扱われていたが、出土地点（HNG-8-E・F・I・J地区茶褐色粘土層）や土器の外面のハケ調整、器壁の厚さ0.8～1.1cm、淡灰白色の色調から同一個体と判断したものである。土器片の湾曲から推定される壺上胴部径はおよそ36～40cmであり、大形壺（土器Ⅰ類）に復元できる。両片は壺の上胴部にあたり、ハケ調整の方向や器壁の厚さから鹿絵画片はやや上位、魚絵画片は胴部中央上ぐらいの位置に復元できる。また、魚絵画破片は魚が右下向きに推定されていたが、調整痕から左上向きになると考えられる。これまで各地で見つかっている魚絵画は横向きか、上あるいは

斜め上向きに描かれる例が多いことから首肯されるであろう。さて、一般的な魚の尾びれが胴部からの直線の交差等の表現であるのに対し、本例の尾びれは扇状で末端が閉じているという特徴がみられる。このような表現は唐古・鍵遺跡に2例ある（田原本町教育委員会 2015）。3の鹿・魚絵画はその一部のみの残存であるが、全体を復元すると10cmほどの絵画（絵画B種）になり、大壺にめぐるように描かれていたと推定できる。鹿と魚の組み合わせは、唐古・鍵遺跡第69次調査の壺（田原本町教育委員会 2009）や清水風遺跡第2次調査の盾と戈をもつ人物画（田原本町教育委員会 1997）が知られる程度で少ない。全体がわかっているのは清水風例であることから、本絵画もさらに複数の絵画が存在した可能性があるだろう。

4は、壺胴部上半に左向きの鹿を描いた土器である。壺の器壁の厚さは約1.6cmで、湾曲から推定される上胴部径は60cm以上になることから、東奈良遺跡で最も大きな壺（土器Ⅰ類）になる。鹿は後足2本が残存するが、全体復元すれば15cmほどの鹿絵画（絵画A種）となり、土器の大きさに対応するように大きく描かれた。ただし、線刻は絵画の大きさに対してやや細い。外面にはタタキが残ることから中期後半で、壺の大きさから有段口縁壺が想定されるであろう。

5・6は、上胴部径が40 cmを超える大形の壺(土器Ⅰ類)に描かれた鹿である。5は左向き、6は右向きの鹿2頭が残存する。5の鹿の形態は2にちかいが、頭部・頸部は胴部から2本線で一体的に表現される。背中が直線的である点は2の鹿胴部にちかから、その発展表現であろう。脚部は前足と後足が「ハ」の字状に広がる形態である。5の鹿の前方にもわずかに線刻画がみられるが、何を表現しているのかわからない。6の右向きの鹿は胴部に対して足が長くバランスがとれていない。5・6いずれも複数の絵画で構成されたものであるが、これら絵画は5 cmにも満たない小さな絵画(絵画C種)であるので、土器の大きさに対して絵画の存在は薄いものであったろう。

7は、胴部上半径約45 cmの大壺(土器Ⅰ類)で2つの絵画が描かれる。『茨木市史』では土器の天地を逆にみており、本図での左側を梯子、右側を柱とする。土器の天地であるが、梯子は建物に架けられるのでその末端が止まっているほうが下とみなすほうが良い。また、右側の柱とする2本の線刻の一方は内湾しており、これまでの2本線の柱の建物の場合はほぼ平行していることからこれを柱とするには違和感がある。さらには2本線の下端には横方向に伸びるV字状の線刻がみられる。このようなことから、この2本線は柱でなく、鹿の頭部から頸部部分の表現で、横方向のV字は角を表現している可能性が高いと考える。ただし、その場合、建物と鹿とは同じ地平線上にはなくバランスが悪いので、さらに別の複数の絵画も存在した可能性があるだろう。

8は口径24 cmの短頸壺で、口頸部と胴部上端が残存する。復元すれば、高さ60 cmほどになる大形品(土器Ⅱ類)である。絵画は、対置方向に銅鐸と鹿・流水文の複数の絵画と文様で構成されている、下端は欠失する。銅鐸絵画は鈕部のみ残存し、鈕頂と側辺に半円の2個一対の飾耳、菱環文様帯を表した綾杉文を描く。全体では10 cmを超える絵画B種に推定できるが、銅鐸絵画は細線で描かれており絵画としては見えにくい。難波洋三氏は、この銅鐸の手本となった銅鐸について、鈕の飾耳の位置から東奈良やそれに後続する撰津系の銅鐸でない可能性が高いとする(難波2022)。本絵画土器が描かれた段階での東奈良遺跡での銅鐸生産の可能性は少ないとしても、継代

的に銅鐸を保有していたことを示すとともに絵画を描く行為は継続していたとして重要である。さらには絵画の描き手の熟練度を測る点において、この絵画の「詳細さ」は一つの指標になる。このような視点で、他の絵画土器をみたとき、唐古・鍵遺跡出土の銅戈を描いた絵画土器もその一つである(田原本町教育委員会編2015)。これは壺胴部に描かれたもので、銅戈の樋内に複合鋸歯文を描く所謂「大阪湾型銅戈」という特定の銅戈を表現したものである。両遺跡とも青銅器鑄造に関わる遺跡であり、青銅器を鑄造していた時期と絵画土器の時期の関係もあるが、それら青銅器を保有し見る機会と継続的に絵画を描く素地が整備されていたことを裏付ける資料になる。

銅鐸絵画の反対面の鹿と縦型流水文の配置と構成は、これまでに類例がない。鹿と思われる絵画は、右側の幅が細く、左側がやや太いので、右向きの鹿で細い部分が頭部、やや太い部分が頸部と思われる。その場合、頭部には逆V字状の線刻があり耳を表し、頸部側に角2本を描いたことになる。角は左右主幹と両枝が描かれている。深澤氏によれば、耳を表現した絵画には西ノ辻遺跡例などあり、角が耳の前に正確に表現されるとする(深澤2014, p. 186)。しかし、この東奈良例のそれは逆になっている。その点では正確さに欠けるかも知れないが、耳まで描いたことと銅鐸を詳細に描くことからすれば、絵画の描き手としては熟練度が高いといえる。鹿の右側には縦型の楡描き流水文を描くが、2回転以下は欠損している。

さて、この鹿と流水文について2つの可能性を考えたい。1つは銅鐸絵画との関連である。この銅鐸絵画の銅鐸については難波氏が想定する六区袈裟襷文銅鐸であるならば、複数の銅鐸を想定し、銅鐸の構成要素である身部にあった縦型流水文と鹿をここに抽出して描いたのではないかと考えるのである。その場合、東奈良集落では縦型流水文のある外縁付鈕2式銅鐸を鑄造しており、それらを含め前述袈裟襷文銅鐸など複数個保有していた可能性を考え、銅鐸の外形(六区袈裟襷文銅鐸)と内部(外縁付鈕2式流水文銅鐸)の特徴をこの壺に象徴的に描いたとすることはできないだろうか。もう一つは絵画が文様に置換されたとする考え方である。鹿と建物は鹿と鋸歯文というような置換がおこなわれており(藤田2023b)、この縦

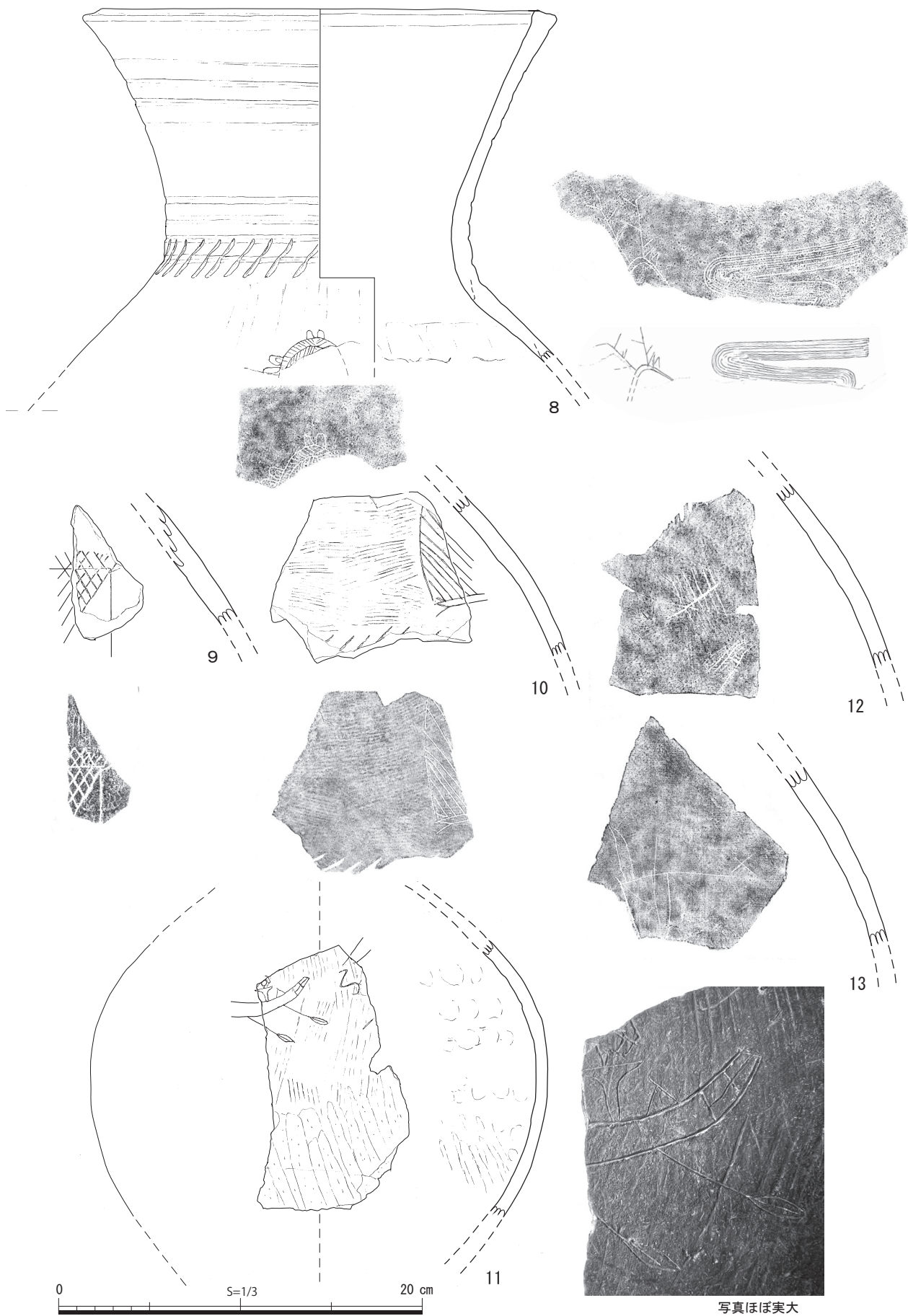
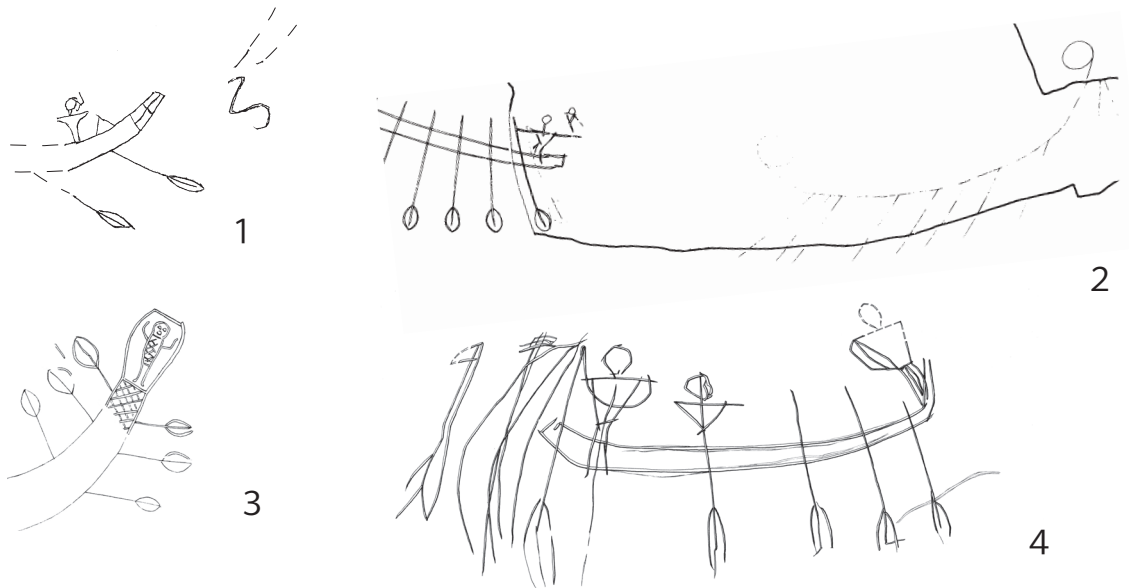


図4 東奈良遺跡の絵画土器(2)





縮尺：不同

1：東奈良遺跡 2：唐古・鍵遺跡第63次 3：唐古・鍵遺跡表採（飯田コレクション） 4：唐古・鍵遺跡第1次

図5 船・人物絵画の類例

型流水文も何らかの絵画から置換された文様とみる。この2つの案については、今後の類例が増えることによって判断できると考える。

9は切妻建物の右端部分で、斜格文を充填した屋根と棟持柱が残存する。また、屋根の斜格文はその上に伸びており、棟上の飾り表現となっている。絵画を全体復元すれば、10 cm程度の大きさ（絵画B種）になるだろう。小片のため、土器の大きさの推定は困難であるが、器壁が1.2 cmと厚いことから土器I類の大形壺になるだろう。

10は、胴径が40 cm以上の大壺（I類）に描かれた絵画である。土器は細条のタタキを施し、胴部上半にハケ原体による刺突文を巡らすもので、西摂津地域にみられる広口壺に推定できる。絵画は左端のみ残存し、半裁した楕円状の円弧内に斜線を充填しているような線刻で画題はわからない。

11は、胴径約36 cmの短頸壺になると推定できるもので、胴径から推定すると大きさは高さ45 cmほどに復元できるもの（III類）で、弥生時代中期後半でも末にちかいと考えられる。胴部上半に船に乗る人物が極細線（B種-1-a種）で描かれている。船は右端のみ残存する。船上の人物は、肩が横方向の直線で両手を広げたようになるが、手の表現はない。肩の下側は内湾し袖のようで、その袖状の線刻はそのまま下方へ伸びるので胴部

や足の表現はなく一体となっている。頭部は丸く描くが、顔面の表現はない。その頭部前面から頭頂部にかけて線刻があるが一部のみで何を表しているのはわからない。頭頂部を覆うような羽状飾りの可能性も考えられるであろう。この人物は櫂を持たず、その人物の向き（角度）から右方向に向いていると推定できるので、船の残存部分は軸先で良いと思われる。その場合、船の先端は縦線2本と横線1本で区画された部分が軸の表現となる。この軸先と人物の間には逆V字状の線刻があり、堅板（波除）を表現している可能性があるだろう。櫂はその先端が木葉状で2本が残存する。船体に対して櫂の表現は大きく、右下方向に伸びるので船の進行方向とは逆の表現となっている。ただし、このような逆の表現は、後出資料になるが西殿塚古墳例（天理市教育委員会2000）にもみられる。この船の右側には縦方向の波状線（2山程度）があるが、その線刻は船の線刻に比べ、浅く太く何を表現しているのかわからない。この船絵画を全体復元すれば10 cm以上になり、本絵画土器の主題になると思われる。このような軸先に立つ人物表現は唐古・鍵遺跡に3例あり、共通のモチーフである（図5、註3）。本土器の胎土は、緻密で東奈良産とするにはやや違和感がある。

12・13は上胴部径が55 cmほどの特大の壺（I類）で、胴部上半に画題不明の線刻がある。11は横



線の下に縦線6本を描く。この下にも不揃いの横線4本を引く。これら線刻の一部はミガキによってつぶれる。したがって、土器製作の途中によるものであることを示す。また、破片上端には文様・絵画とも判断できないへらによる刺突が3つある。12は後刻あるいは調査時の傷ともとれるような線刻で、縦線はやや深く、横線は浅い。一部は矩形を呈し、その右側は×状の浅い線刻である。

14～18は、弥生時代後期の絵画・記号土器である。14は長頸壺の頸部、15は広口壺の胴部に描かれた龍である。S字状の胴部にV字状（三日月状）あるいは2本線で龍の足を表現している。14の龍は左向きで、その龍から約90度左側の上部に竹管文を横方向に2つ押捺している（註4）。龍と三叉形等記号の組み合わせはあるが、竹管記号との組み合わせは知らない。14の龍の胴部は小さく、足のV字状表現が大きく、抽象化が進行している。15の龍は上向き（右向き）で、省略化が進んでいる。16は長頸壺と考えられる壺の胴部に弧線を重ねて描いたもので、龍とも記号とも判断できない。17は壺胴部に描かれた鹿・4脚動物とされていたものであるが、土器片の湾曲・傾きから天地が逆であると判断した。横向きの上三日月状の上に縦線4本、下に縦線12本（4本3組）を描いており、線刻の収束の仕方からも天地については首肯されるものとなる。本土器は後期前半の長頸壺で、その胴部上半に描かれた記号と判断するが、絵画から記号で想定するならば、船の可能性があるだろう。本記号の右側には、太描きのへらによる斜線がある。18は、4点の破片からなる絵画土器である。広口壺の胴部上端（18-a）の内外にはV字状線刻、他の3片（18-b・c・d）は胴部中央上位で複雑な組み合わせの線刻がみられる。当初、弥生時代中期という認識のもと、18-c・dは土器片の向きを90度ほど右回転させ、人物でないかとする。しかし、○を頭部としたときそれに連結する線刻は人物胴部他の部位になり難いし、土器片の湾曲や器壁の厚さ、内面のナデ調整が一定の方向にならない。したがって、掲載図面のような配置に描かれたとするが、後期段階では土器の天地を無視して描くものもあるので線刻自体から想定するほうが良いが、その場合においても画題はわからない。これら絵画は壺の大き

さからみて、壺全体に巡らされたものであり、後期後半にみられる幾何学的な文様・絵画を取り入れた意匠と同様なものであろう。

19は、一見、船体（やや湾曲し平行する2本線）と櫂（先端が木葉状）のようにみえる絵画であるが、土器片の傾きや器壁が約0.7cmと薄く、土器片の湾曲が強く、土器の時期や器種が特定できない。

20は器壁が約0.9cmで左端がわずかに湾曲するが、ほぼ平板である。その平板な面に粘土紐を貼り付けて表現したもので、胎土は弥生時代前期のように思えるが、判断できず、器種・時期が特定できない。したがって、土器・土製品のどちらともいえないことから、天地もわからない。一部接合痕跡のように見える部分があるので、それを参考に天地を決めると動物状の表現は左向きになる。その場合、上側にのびた棒状の部分は下側より長く、また、粘土紐の押さえ方も上側に力点があるように思われるが、決め手にはならないかも知れない。俯瞰的にみれば四足動物とみることもできるが、俯瞰的なみかたで良いのか判断しがたい。近畿地方では、浮文による表現は弥生時代中期後半の柏原市平野遺跡の犬もしくは鹿（北野1995）、唐古・鍵遺跡の不明意匠（田原本町教育委員会2009）が知られる程度であり、この位置づけは難しい。

#### 4. まとめ

今回、東奈良遺跡から出土した絵画土器の観察を通して個々の所見を述べた。ここでは東奈良遺跡の絵画土器の特質をまとめておきたい。

東奈良遺跡の弥生時代中期の絵画土器の多くは破片で時期特定が難しいものが多いが、その中で器種が特定できる1・2・8はおおよその時期がおさえることができる。摂津地域は森田克行氏によって地域編年（森田1990）がなされており、1の細頸壺（註5）と2の有段口縁壺は摂津IV-1・2様式ごろ、8の短頸壺は摂津IV-4様式ごろ、11も短頸壺の可能性が高いのでこの時期であろう。その他は胴部片のため、時期の特定ができないが、大形壺（有段口縁壺？）に復元できることから摂津IV-1・2様式にちかい時期におさまると思われる。鹿絵画では、深澤氏の鹿絵画の変遷（深澤2014）を参考にすると、2（三角単輪）

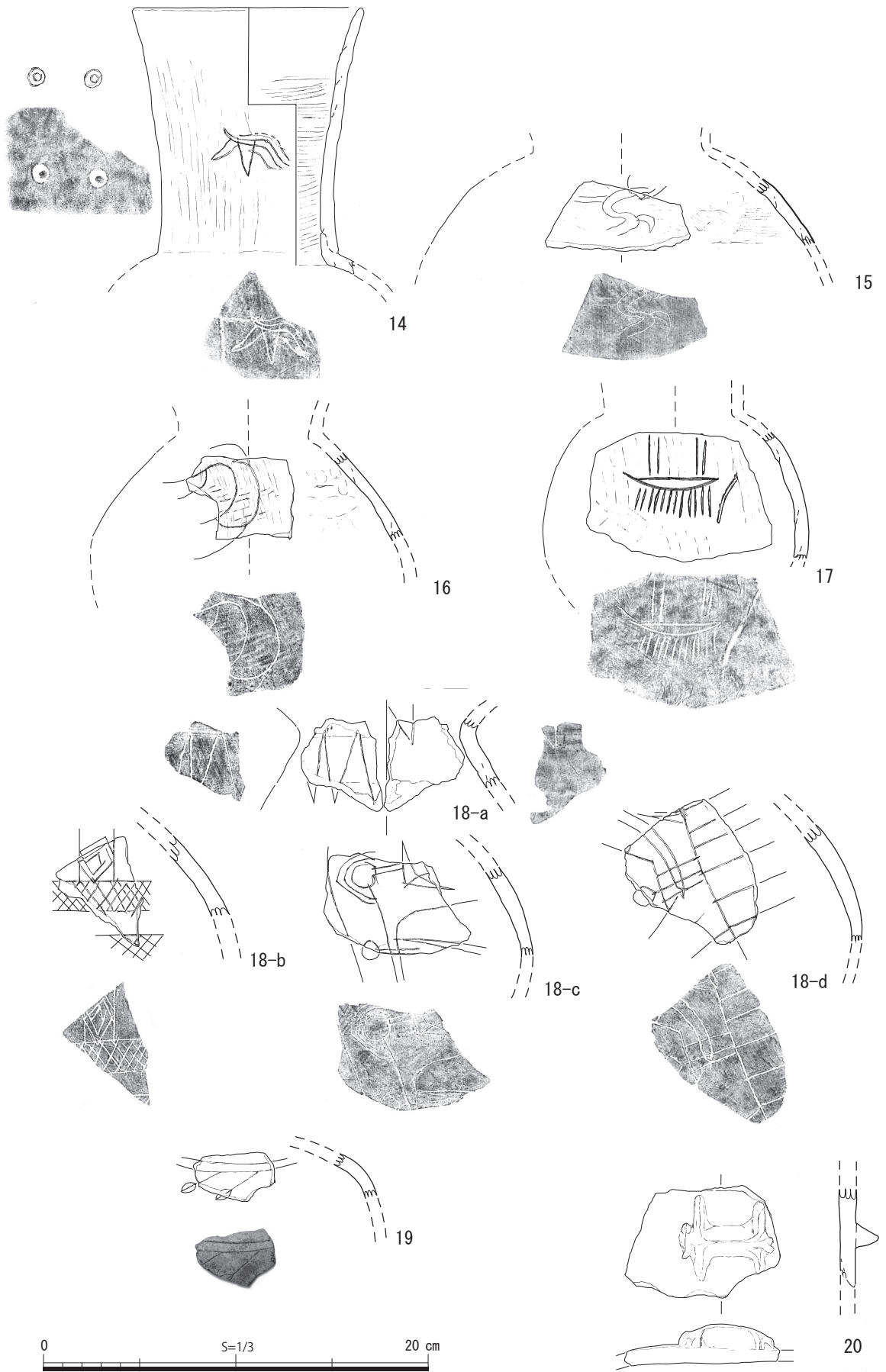


図6 東奈良遺跡の絵画土器(3)

→1 (一線輪輪) →5 (二角輪輪)・8 (二角輪欠) になる。私が重視する胴部形態の変遷では、2→1 (3・4)・5→6 (8・7?) のような想定になる。いずれにしても弥生時代中期後半の中で鹿絵画が連綿と描かれ変遷したことを示すものであり、絵画を描く行為が定着していたことを示している。また、器高が60 cm以上の大形壺に大きく絵画を描く土器があることや画題が建物や鹿、魚など多種で複数構成を成している点を含め、東奈良遺跡では絵画土器を用いる祭式(「見せる・見る絵画土器」)が定型化していたことを裏続けることになる(藤田 2024 予定)。また、2の有段口縁壺にみられるような各地に共通する器種と描法の存在は、絵画土器を用いる祭式が整っていることを示しており、その初源的な形態が東奈良遺跡にも存在したことを示す。このような絵画土器のありかたを示す遺跡は、現在のところ近畿地方では見当たらない。大阪府下の河内地域では複数点出土する遺跡が多くあり、八尾市亀井遺跡では20点ちかく(画題がわかるものは鹿3点程度)、また兵庫県川西市加茂遺跡からは10数点が出土(川西市文化財資料館 2020)し、東奈良遺跡とほぼ同じような数量になるが、大きな違いは画題の豊富さと祭式の定型化にある。東奈良遺跡の絵画土器の数量は、奈良県の唐古・鍵遺跡、清水風遺跡に次ぐ量になると思われる(註6)。両者は青銅器生産遺跡という共通性をもっており、青銅器を通して絵画を学習できる環境があるとともに、それらを通しての祭式が整備されていたからこそ、両遺跡に多種の絵画が存在したと考えられる。それは絵画土器を通して、地域の中心的な存在であったことを裏付けることになる。

本稿を執筆するにあたり、清水邦彦・正岡大実両氏をはじめとする茨木市教育委員会の方々には大変お世話になりました。記して感謝申し上げます。

#### 註

- 1) 唐古・鍵遺跡の鋳型には、重弧文が刻まれているものがあるが絵画はない。しかし、鋳造に失敗した袈裟襷文銅鐸片が同じ場所から出土しており、区画内に不明絵画の一部が鋳だされている(田原本町教育委員会編 2009)。
- 2) 私が有段口縁壺とする形態は、縦長の胴部に外湾する頸部、頸部から直口する口縁部を有するもので、弥生式土器集成本編(佐原 1968)では「壺形土器G」とし、また、地域によっては大型受口壺や段状口縁壺と呼ばれているものを指す。
- 3) 唐古・鍵遺跡の3例は、以下のとおりである。採集資料飯田コレクション(末永・小林ほか 1943/藤田 2023a)、第1次調査(末永・小林ほか 1943)、第63次調査(田原本町教育委員会 2015)。
- 4) 龍絵画と竹管文(記号)との位置関係であるが、初出文献(東奈良遺跡調査会 1979)では、龍の左上に配置する図であったが、春成秀爾氏の論文において正しい位置関係が示されている(春成 2011)。
- 5) このような細頸壺は摂津地域では示されていないが、隣接する山城地域では山城IV-2様式に存在する(森岡 1990)。
- 6) 東奈良遺跡では膨大な出土品があり、現在再整理が進められており、今後も多くの絵画土器が発見されることが見込まれる。

#### 参考文献

- 秋山浩三・小林和美・仲原知之・山崎頼人 1997「特殊表現をもつ弥生建物絵画」『みずほ』第23号 大和弥生文化の会 pp. 30-41
- 茨木市史編さん委員会編 2014「絵画土器」『新修 茨木市史 第七巻 史料編 考古』 pp. 174-176
- 茨木市立文化財資料館編 2013「銅鐸の絵画土器」『東奈良遺跡の青銅器鋳造』展示パンフレット
- 茨木市立文化財資料館編 2019『発掘速報展いばらき 2018』展示リーフレット
- 大阪府教育委員会 1969「高槻市安満弥生遺跡発掘調査概報」『大阪府文化財調査概要 1968』 p. 6
- 大野左千夫・井馬好英 2001「太田黒田遺跡出土の弥生絵画土器」『紀伊考古学研究』第4号 紀伊考古学研究会 pp. 95-102
- 奥井哲秀 1980「東奈良遺跡出土の絵画土器」『考古学雑誌』第66巻第1号 日本考古学会 pp. 84-89、pp. 85-86
- 北野重 1995「平野遺跡出土の絵画土器」『みずほ』第16号 大和弥生文化の会、pp. 46-49
- 加藤光臣 1980「広島県内出土の絵画土器について」『考古学雑誌』第66巻第1号 日本考古学会 pp. 55-57
- 唐古・鍵考古学ミュージアム編 2020『よみがえる弥生



- の祭場—唐古・鍵遺跡と清水風遺跡』唐古・鍵考古学ミュージアム展示図録 Vol. 27 p. 19-19-2
- 川西市文化財資料館 2020『加茂遺跡絵画土器展』展示リーフレット
- 財団法人 大阪文化財センター編 1980『亀井・城山』 pp. 219-225
- 財団法人 大阪府文化財調査研究センター編 1998『東奈良遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第 32 集 -2 pp. 143-165
- 財団法人 和歌山県文化財センター 2007「資料紹介 西飯振Ⅱ遺跡出土の絵画土器」『財団法人 和歌山県文化財センター年報 2006』 pp. 41-43
- 佐原真 1968「畿内地方」『弥生式土器集成 本編』東京堂出版 p. 67
- 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎 1943『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学考古学研究室報告第 16 冊 p. 107、pp. 104-106
- 高村勇士 2020「茨木市東奈良遺跡」『令和元年度冬季企画展 歴史発掘おおさか 2019』大阪府立近つ飛鳥博物館
- 田原本町教育委員会 1997「楯と戈をもつ弥生の戦士」『田原本町埋蔵文化財調査年報 6 1996 年度』 p. 15
- 田原本町教育委員会 2009『唐古・鍵遺跡Ⅰ 特殊遺物・考察編』田原本町文化財調査報告書 第 5 集 遺物 図版 7-P5010-1、遺物図版 9-P5012、遺物図版 211-M5211
- 田原本町教育委員会 2015『唐古・鍵遺跡考古資料目録Ⅰ—土器編 1 (絵画・記号・文様)—』 p. 22- 絵画 005、pp. 46-47- 絵画 087・090、p. 35- 絵画 045、p. 21- 絵画 004
- 中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会 1971『瓜生堂遺跡』 p. 40-42
- 天理市教育委員会 2000『西殿塚古墳・東殿塚古墳』天理市埋蔵文化財調査報告 第 7 集 pp. 85-90
- 奈良国立文化財研究所 1998「西方官衙南地区—第 85 次」『奈良国立文化財研究所年報 1998-Ⅱ』 p. 7
- 難波洋三 2022「東奈良における銅鐸生産とその後の動向」『銅鐸から弥生時代社会を見直す』東奈良遺跡銅鐸発見 50 周年プレ事業 2022 シンポジウム資料集 pp. 68-69
- 原口正三 1973「B. 安満遺跡の遺物」『高槻市史 第 6 巻 考古編』高槻市史編さん委員会
- 春成秀爾 2011「弥生時代の龍」『祭りと呪術の考古学』塙書房 p. 285 図 95-16
- 東奈良遺跡調査会 1979『東奈良遺跡発掘調査概報Ⅰ』図録編 図版 95-42
- 深澤芳樹 2014「一色青海遺跡出土瓢形壺の鹿絵をめぐる」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 186 集 一色青海遺跡Ⅲ 遺物』公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター pp. 187-191
- 藤田三郎 2003「絵画土器・特殊土器」『奈良県の弥生土器集成 本文編』大和弥生文化の会 p. 113-159
- 藤田三郎 2023a『唐古遺跡採集の「人物と権の表現がある船」の絵画土器』『奈良女子大学百周年記念資料室整理作業報告書—令和 4 年度—』奈良女子大学記念館運営委員会 pp. 22-36
- 藤田三郎 2023b「唐古・鍵遺跡と清水風遺跡の絵画土器」『何が歴史を動かしたのか』第 2 巻 弥生文化と世界の考古学 (春成秀爾編) 雄山閣 pp. 88-89、pp. 85-86、pp. 87-88
- 藤田三郎 2024. 5 刊行予定「弥生土器における二者一見せる・見る絵画土器の創出と祭場—」『日本考古学の論点』(広瀬和雄編) 雄山閣
- 正岡大実 2019「参考資料 東奈良遺跡出土の新出絵画土器」『郡遺跡・倍遺跡発掘調査成果シンポジウム資料 みえてきた弥生の風景』茨木市教育委員会
- 正岡大実 2022「東奈良遺跡出土人物表現のある円盤形土製品について」『茨木市立文化財資料館 館報』第 7 号 茨木市立文化財資料館 pp. 12-15
- 村田幸子 2012「弥生時代絵画の一断面」『日本考古学』第 33 号 日本考古学協会 pp. 5-9
- 森岡秀人 1990「山城地域」『弥生土器の様式と編年—近畿編Ⅱ—』木耳社 p. 266- 図 430・431
- 森田克行 1990「摂津地域」『弥生土器の様式と編年—近畿編Ⅱ—』木耳社 pp. 77-191